

可觀小説卷五

一、大久保彦左衛門が戦場の心得

嶋原合戦の時、松平伊豆守可被遣候旨被仰渡候。出馬の前、大久保彦左衛門宅へ被參被申候は、御自分には跡々覺ある御人也、此度何ぞ心得に罷成事候はば、御申聞候様に仕度と被申候へば、何の御心得に罷成事を可被申候哉、何事も無之候。例の十露盤を旗にも指物にもし、人數も十露盤にてはじき立候が能候とて、取合不申候。伊豆殿無正なる事を被申候。おどけ狂言戯話を世帯におどけと云。も時による事なり。何ぞ思召寄承度と強て被申候。いや何も可申事無之候。合戦は時に至ての變化に候へば、爰元居候て何を申候ても、用に立申ものにて無之候。人々料簡のごとくにしたるが能候。只ひとつ申度事候へどもと被申候に付、少も心底を不殘承度と被申候へば、そこにて候。此度の儀一揆どもの籠城、何の鉞や鎌迄持て居て何程の事かあらんと、敵をいやしめあなどり給ふ事なかれ。只天下わけめの合戦と思召、卒爾なきやうに御心得被成候事第一に候。此外は何も申事なし

と也。豆州大に信服して、さればこそ御自分の事故、左様の御一言も承らんと是迄參り候。尤至極せりとして出陣なり。果して天草四郎も只のものにては無之とぞ、彦左下墨の通なり。

一、天草四郎の首獲たる人

四郎が首を獲たるは、鍋嶋加賀守殿内神半右衛門と云もの也。四郎が首を獲たるは、細川頼中守殿にて陳佐左衛門是なり。神半右衛門と云は誤りなるべし。段々城を乘申候に付、神氏も進行く。此時忽然として一人ありて云様は、常々積する所の神なるべし。大將を討たんと思はゞ、是より左へくへ行べし。其末に葦垣あり、それより左へ付くべしと云。教の如く行たる所に、藁葺の物置の様なる所あり。その所へ行てみれば、人二三人みえたり。彼者を見て云様は、此所迄心がけ來給ふは奇特なり。我は此度の大将天草四郎也。よき敵にあはゞ名乗て討死すべきと相待候へども、來る人なかりき。我首取候へとて少もさわがず。神は此言葉に行當り、少し猶豫するを見て、はて是迄深入し、高名を心懸らるゝには似合ぬ事也。はやく首を取候へと申故、其儘首を取候。何ぞ證據にと見廻せども、すはだにて大小も不帶、何を驗にす

べきものなし。其脇につばくら袋士民の用ふるに、米五六升許入たるあり。是成ともと思ひて添來り、首實驗の時是を添て出す。尤四郎が首を見知ものも有て無疑。其上豆州の云。此首尤疑なし、此米の入たるを添へたるにて、猶以て無疑大将也。かやうに兵糧盡果たる時なるに、大将なればこそ此六升許の米を持ちたれ。是は外の時鐘、打物を添來るよりも増たる證據なりと。人皆豆州のはやき批判を感ず。

一、主人の使途中にて讐に逢ふ時

伊豆守殿、或時木下順庵に尋られしは、親の讐を持たるもの、主人の使に行道にて讐に逢候時は、使を不動して是を討べきものに候や。又使の方を勤て仇を撃申間敷候や。いづれを先にすべく候哉。忠孝の二つ我等は何とも難辨候とあり。順庵聞て、御合點まゐり申間敷候。左様の事は學問にて候とて答には、右の様成事はなき事にて候。親の讐持たるもの、主人を持ってつかへ可申様無之候と返答也。難有答也とぞ。

愚云。順庵の答語誠に能被申候。父及び兄弟乃至從父昆弟迄の復仇の差別は、禮經にもみえたり。順庵其を以て如

此申たるもの也。但此答は順庵にては不可有之。仔細は順庵は天和年中、賀藩より被召出候以來、江戸にて發興也。伊豆守殿は天和以前に死去也。そのうへ此答語、順庵の氣象に不似。爲人温恭にて、當路の人などへか様に直切成事被申人にてなし。定て林春齋か、山崎闇齋なるべし。闇齋は毎々權勢の人に向て、か様の事共申たる人、其上時代も相應なり。春齋も其人とは不被思候得共、林家の事、心安く應答有之候。其上學識も林氏の巨壁なればなり。

一、板倉内膳正の討死

板倉内膳正殿、天草にて討死の事を人々評判する事也。忠死とは難申と云ふ人もあり。此等は難決事也。周防守殿、出陣前にも、此度は大事の所なり、一揆と思ひ輕々敷振舞不可有之。中々思ふ様には難成からん。畢竟討死と思ひ極るより外は有まじきと被申候共云。又伊豆守殿參着以後に候はゞ尤なれども、討死ははやきと申ものも候。伊豆守重て被遣候に付、周防守殿より彌討死を勧められしとの説もあり。未決の説也。